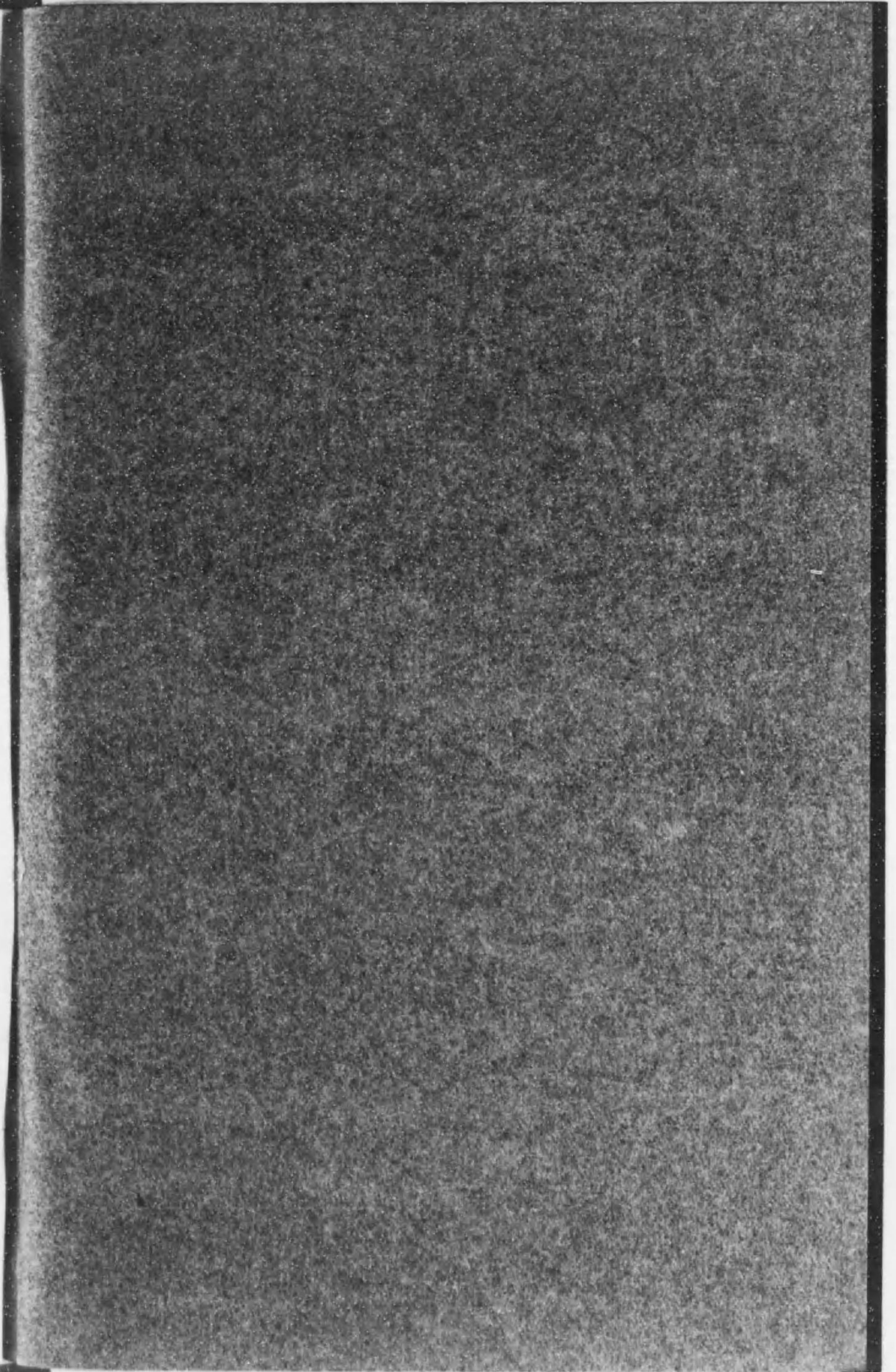


始









特10  
59

初

吉井先生の處  
女作「酒ほが  
ひ」の歌三百  
餘頁。魯魚の  
誤を正し、新  
らたに編次を  
立て、題を「初  
戀」と改めて  
上梓す。

初山書店

吉  
井

大正  
4. 4. 19  
内交



特10  
59



初

戀

吉  
井





初戀

五十五首

海邊の戀

八十五首

後の戀

三十七首

祇園

四十一首

わかうど

四十二首

酔狂

三十五首

南船北馬

二十五首



初

戀



とこしへに覺めざる人と戯れぬ心ふたつを  
もてあそびつつ

われ生る君なほあらずわれ長ず君ありすで  
に戀人として



われを思ふこれ囚はれし夜半の身かはた放  
たれじ曉の身か

かにかくにいとにこやかに親しみぬ薄なさ  
けびと深なさけびと

覺むる日の近きも知らずはれやかにもの云  
ふ君のあはれなるかな

唇は乾き肉いたづらに枯れゆく日なり君に  
凭らねば



姦かましくななに嘯さへつるとわれ問とひぬもだすとき  
なき鳥とりの少女をとに

わが友ともが鳥とりになぞらへあざけりし群ぐんにまじ  
りて君きみと遊あそびぬ

君きみとゆく都みやこ大路おほぢのただなかの忍しのびありきを  
をかしと思おもひぬ

相あひゆきぬ戀こひおほきごとかたる子こと初はつ戀こひのこ  
とよそほへる子こと



おとろへよ顔蒼ざめて今日もあれかくのろ  
ひたる君ならなくに

黒髪は夜にかたどりてつくられぬおん顔は  
晝にかたどる

七人の子がうつされてありしごとわれうつ  
されぬ君が瞳に

夜もすがらかくさまよひてあるもよしこの  
まま家に歸らぬもよし



狂ほしき少女のこころしづまれと吒枳尼の  
法す男のために

10

君おもふ子なれどをかし或る宵は囊家に入りて  
骰子投げしかな

あまりにもあかるき晝をさへぎると君が衣  
を帳にするも

唇は木の實のごとく甘ければ朝にたうべ夕  
にたうぶる

11



くちづけを禁せられたる戀人はひと日ひと  
日におとろへにけり

12

よその子を思ひうかべてある時と知らでわ  
れ凭る君が腕に

いくたりの男のために取られたる手かは知  
らねどわれも取りたる

嵐よりややはらかに胸をふくねたみにま  
さる趣はなし

13



この夜また身に染むことを君に聴く沈丁花  
にも似たるたをやめ

君を見て近まさはた近をとりわかぬわが  
身となりにつけらしな

愚かにもともに死なむとかねごとすこの世  
にかかる戀のあらぬに

胸のなか争ふ聲におどろきぬ誰ぞ誰をしも  
追はむとすらむ



傍かたはらのつれなしびとは遠をち方かたのめでしれびとに  
及およばざるかな

いくたびか棄すてむとしつれかにかくにその  
つれなさを忘わすれかねつも

いつのまにかくいぢらしき手たを弱ろ女めとなり  
けるかと君きみを思おもひぬ

たたかひの猛も者さにならひてわが君きみの唇くちびるにし  
も走はしりける子こぞ



くちづけを七度すればよみがへる戀と輕ん  
じくちづけをする

過ぎし日にたづねず來る日に問はずただ今  
日へのみ求むる君よ

黒髪が錨綱より強きこと君にをしへて歸り  
けるかな

わが宴なかばならぬに君思ひこころにはか  
にさびしくなりぬ



金曜きんえうに船出ふなでを忌むいと云いふごとく霰降あられふる日ひに  
相會あひあふを忌むい

20

悲かなしみぬ戀こふべからざる人ひとを戀こひありける  
われと思おもひ知しる時とき

笑わらめばみな男をとこはまへに伏ふすものとなほも思おも  
ひぬ覺さめざる少女をとめ

この君きみはかいなでびとの言葉ことばにも笑わらをむく  
みぬ情なさけあるかな

21



異<sup>こと</sup>なりぬむかし會<sup>あ</sup>ひしは人<sup>ひと</sup>の少女<sup>をとめ</sup>いま別<sup>わか</sup>れ  
しは獸<sup>けもの</sup>の少女<sup>をとめ</sup>

蛇<sup>へび</sup>の子<sup>こ</sup>はいづこへかへる往<sup>ゆ</sup>く方<sup>かた</sup>もなしとお  
もへば涙<sup>なみだ</sup>ながれぬ

歎<sup>なげ</sup>きつつ三<sup>み</sup>年<sup>ねん</sup>のまへの相<sup>あ</sup>知<sup>し</sup>らぬふたつの世<sup>よ</sup>  
へと別<sup>わか</sup>れて歸<sup>かへ</sup>る

君<sup>きみ</sup>かかる寂<sup>さび</sup>しき人<sup>ひと</sup>を選<sup>えら</sup>びしがあやまちなり  
とわれは別<sup>わか</sup>れぬ



求めたまへ放縦にて厭く知らぬ君が心を満  
たすべき子を

24

あざけりは君見て胸におこりたる思のひと  
つ心をかしき

また戀の無残なる手に奪はれむ身と思はね  
ばまろ寐しにけれ

みづからの戀をみづから知らずして誰があ  
さましき戀かと云ひぬ

25



思はずとひそかに云ひしわが聲の高かりし  
にもおどろかれぬる

戀の埴敷あるなかのひとつとも棄てられ人  
を眺めけるかな

君を棄つまた見る時のあらむやと猛者のご  
とくに振舞ひしかど

君おもふしかはあれどもわれおもふこの思  
より戀は破るる



怖ろしき思ぞ胸にうかび來し君を殺さばか  
なしみなからむ

木枯に耳かたむけぬ遁れゆく君が心に聴き  
入るごとく

衰へしともなほ知らぬ君見ればああ冷笑ぞ  
頬にのぼりぬる

うらめしと繰り返すこと三度して君は別れ  
ぬたをやめのごと



海邊の戀

おとろへし君が姿をあざみたる笑消ゆると  
き涙ながれぬ



春の風

夏は來ぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわが  
こころ燃ゆ

君がため瀟湘湖南の少女らはわれと遊ばず  
なりにけるかな



夏の帯砂のうへにながながと解きてかこち  
ぬ身さへ細ると

八月の避暑地の街のゆふまぐれひとりほか  
なく酒肆に入る

赤き旗高くかかげし玉突場海へまがれば君  
が窓見ゆ

君が家の走りづかひの下男あまりみにくき  
文使ひかな



友ありき禁衛軍の服を著て己がものごと  
わが君を云ふ

6

君が間に接吻のにほひはただよひぬいま人  
來なば何と云ふらむ

砂山は墓のごとくにきづかれぬ君の墓なり  
われの墓なり

自墮落の身を砂の上に横たへぬ信天翁と誰  
の名づけし

7



海風は君がからだに吹き入りぬこの夜抱か  
ばいかに涼しき

8

草枕砂まくらしてものがたる男女をさはな  
とがめそ

砂山に追放の客のすがた見ゆあはれわが目  
にわが姿見ゆ

土蜂のうなりを聴きてわれは寝る戀ももの  
うく砂山に寝る

9



君きみはいま眞ま晝ひるの砂すなのかがやきに目めやくらみ  
けむわが肩かたに凭よる

くれなるの薔さく薇びのなかに倒たれ伏ふすごとくに  
君きみは砂すなにまるびぬ

滑な川がはいくたび君きみの手てを取とりて夜よ半はんの水みづを渡わた  
りける子こぞ

わが耳みみに夜よがささやくとうたがひぬかたはら傍らにあ  
る君きみを忘わすれて



君きみに似にしとつくにびとの少女をとめ住すむ江えの島道しまち  
の向日葵ひるまりの館たて

戀人こひびともうすきころもを身みにまとい朝あさ逍遙せうたうす  
夕ゆふ逍遙せうたうす

濱涼はますずみ都みやこより來こし少女をとめらのゆかたゆゆしき  
夜よとなりしかな

新あたらしき夏なつのかをりのただよへるなかをさま  
よひ往ゆきぬ我等われらは



船大工小屋の戸口にあらはれてわれらをわ  
らふ晝顔の花

あだ名して孔雀と呼べるたをやめのきらび  
やかなる手に捲かれける

君見ゆる貝細工屋の招牌をすこしうごかし  
海の風ふく

鎌倉のうら山づたひ君とゆく山百合の花月  
草の花



なつかしき潮の音もちかづきぬふたりが心  
躍らざらめや

漁火にまたも心をさそはれぬふたり濱邊に  
夜もすがら寝む

或る夜半は大雨に濡れて入りきたる君が姿  
におどろきしかな

君が窓海鳥玻璃にあたる時つと離れたるわ  
れならなくに



鶴が岡八幡宮の石段の十級にしてつかれた  
るひと

わが住みし山寺の椽にぬぎすてし君が草履  
にこほろぎの啼く

秘むべきは夏のゆうべに裏山の窟のなかに  
ともなひしこと

君が家のまへを通るもはばかりぬ鎌倉びと  
は口のさがなし



隠<sup>かく</sup>しるぬひとり密<sup>ひそ</sup>かに忍<sup>しの</sup>び來<sup>き</sup>て君<sup>きみ</sup>が夜<sup>よ</sup>戸<sup>と</sup>出<sup>で</sup>  
を待<sup>まち</sup>ちたるこ<sup>こ</sup>とも

月<sup>つき</sup>夜<sup>よ</sup>よし七<sup>しち</sup>里<sup>り</sup>が濱<sup>はま</sup>の水<sup>みづ</sup>際<sup>ぎわ</sup>の白<sup>しろ</sup>く顛<sup>かぶ</sup>ふを君<sup>きみ</sup>と  
ながむる

酒<sup>さか</sup>甕<sup>がら</sup>に凭<sup>よ</sup>るを知らざるたをやめは砂<sup>すな</sup>濱<sup>はま</sup>船<sup>ぶね</sup>に  
凭<sup>よ</sup>りてかたりぬ

砂<sup>すな</sup>濱<sup>はま</sup>の船<sup>ぶね</sup>に腰<sup>こし</sup>懸<sup>か</sup>け君<sup>きみ</sup>にきく戀<sup>こひ</sup>ものがたりあ  
はれなるかな



うすぐもり涙なみだのいろに海見うみゆる涙なみだのいろに  
砂原見すなはらみゆる

われらゆく岬みさきの色いろの黄きなる時真ま晝ひるの月つきのす  
さまじき時とき

鳥とりのごとおほくの人ひとはたはむれぬ鷺わしのむす  
めの君きみもまじれる

海うみに入いり浪なみのなかにてたはむれぬ鱈はたの廣ひろも  
の狭さものらのごと



ましぐらに砂丘をくだり海に入るからくも  
君の手より遁れて

ねむるもの赤き蜻蛉とわが君と濱防風にま  
しろき砂に

うなだれて海邊を歩む漂泊者そのごとくに  
もわれの歩める

わが少女ふるふ臉に涙してただかなしげに  
海を見まもる



朝あさごとごとににかなかならずらずおおなじなじ濱はま邊べにてにて會あへへばば笑わらひひ  
ひひててゆゆくく少せう女にょあありり

藻もののかかををりり四し邊へんををここめめぬぬ黒くろ髪かみののににほほひひよよりり  
やややや淡あはけけれれどどよよしし

ああななかかままとと輕かろくくつつぶぶややきき君きみ去さんんぬぬたたははれれをを  
どどもものの群ぐんががるるななかかをを

鎌かま倉くらのの少せう女にょののむむれれががももててははややすすそそののみみややびび  
ををとと云いふふはは誰たがが子こぞぞ



その少女舞姫に似る帯をして厚おしろいの  
暑かりしかな

なでしこや大佛道の道ばたに君が棄てたる  
貝がらの咲く

草土手を蜥蜴はしりぬわが君の足の音にも  
おどろくものか

悲しげに海邊の墓のかたはらの撫子を摘み  
かへりたまひぬ



或<sup>ち</sup>る朝<sup>あさ</sup>のそぞろありきに拾<sup>ひろ</sup>ひたる櫛<sup>くし</sup>ゆる心<sup>こころ</sup>  
みだれけるかな

30

海<sup>うみ</sup>出<sup>い</sup>でて酒<sup>さか</sup>場<sup>ば</sup>に入<sup>い</sup>ればわが椅<sup>い</sup>子<sup>す</sup>の主<sup>ぬし</sup>まら顔<sup>がほ</sup>  
にあるがたのしき

海<sup>うみ</sup>近<sup>ちか</sup>き晝<sup>ひる</sup>の酒<sup>さか</sup>場<sup>ば</sup>にありながら誰<sup>た</sup>が子<sup>こ</sup>ぞ接<sup>き</sup>吻<sup>づ</sup>  
の音<sup>ね</sup>を立<sup>た</sup>つるは

さけぶらく涼<sup>すず</sup>しき色<sup>いろ</sup>の酒<sup>さか</sup>もて來<sup>こ</sup>海<sup>うみ</sup>の少<sup>せう</sup>女<sup>にょ</sup>を  
さかなに飲<sup>の</sup>まむ

31



笛吹くは誰が莊園を守る子ぞあはれを添ふる戀のわかれち

悪僧は何をおもひて君が家の戸をたたきしや夏の夜半に

思はずといと冷やかに云ひはなら猛然として獅子窟に入る

その夜半の十二時に會ふことなどを誓へど君の薄なさけなる



君<sup>きみ</sup>どわれ夜<sup>よ</sup>半<sup>は</sup>の二<sup>に</sup>時<sup>じ</sup>ごろ八<sup>はち</sup>幡<sup>まん</sup>の石<sup>いし</sup>の鳥<sup>とり</sup>居<sup>ゐ</sup>の  
臺<sup>だい</sup>に愁<sup>しみ</sup>ひぬ

もろともに鎌<sup>かま</sup>倉<sup>くら</sup>憂<sup>う</sup>しとぬけ出<sup>い</sup>でぬ君<sup>きみ</sup>や誘<sup>さそ</sup>ひ  
しわれや誘<sup>さそ</sup>ひし

伊<sup>い</sup>豆<sup>づ</sup>も見<sup>み</sup>ゆ伊<sup>い</sup>豆<sup>づ</sup>の山<sup>やま</sup>火<sup>び</sup>も稀<sup>まれ</sup>に見<sup>み</sup>ゆ伊<sup>い</sup>豆<sup>づ</sup>はも  
戀<sup>こひ</sup>し吾<sup>わが</sup>妹<sup>もへ</sup>子<sup>こ</sup>のごと

かの宵<sup>よ</sup>の露<sup>ろ</sup>臺<sup>だい</sup>のことはゆめ人<sup>ひと</sup>に云<sup>い</sup>ひたまふ  
なと云<sup>い</sup>へる君<sup>きみ</sup>かな



葦の葉の鳴るがかなしき日となりぬ河邊に  
立ちて君を思へば

滑川越すとき君は天の河白しと云ひてあふ  
ぎ見しかな

しろがねの砂を踏めばかなしみの歌きこゆ  
なり海近うして

砂の上の文字は浪が消しゆきぬわがかなし  
みは誰か消すらむ



夏の夜の肺病院のうすあかりほのかにさせ  
ば君もかなしき

おどろかす鷗もあらぬしづけさにその接吻  
の長かりしかな

誰が舟ぞ櫓の音みだし漕ぎゆくはその櫓の  
音に心みだるる

濡髪は夏をはるまで乾くことあらしと君を  
のろひしや誰



遠空のいなづま見ればかの宵の玻璃窓の外  
を思ひ出づと云ふ

身に染みぬその夜の海の遠鳴も鷗のこゑも  
君がなさけも

朝の海昨夜の嵐のなごりより昨夜の少女の  
なごりをおもふ

ひと夏は情を盗むかたきとも知らでわが頬  
を寄せにけるかな



眇<sup>べう</sup>目<sup>もく</sup>の山<sup>さん</sup>莊<sup>さう</sup>守<sup>もり</sup>がわが君<sup>きみ</sup>を思<sup>おも</sup>ふて病<sup>や</sup>むと云<sup>い</sup>ふ  
はまことか

鎌<sup>かま</sup>倉<sup>くら</sup>の扇<sup>あふす</sup>が谷<sup>や</sup>の山<sup>さん</sup>莊<sup>さう</sup>に朝<sup>あさ</sup>のわかれを惜<sup>を</sup>しみ  
けるひと

藻<sup>も</sup>を拾<sup>ひろ</sup>ふ少<sup>をと</sup>女<sup>め</sup>ら云<sup>い</sup>ひぬこのごろはかのわか  
うどの窠<sup>くわ</sup>れたること

焼<sup>や</sup>砂<sup>すな</sup>に身<sup>み</sup>を投<sup>な</sup>げ伏<sup>ふ</sup>してかなしみぬ胸<sup>むね</sup>の痛<sup>いた</sup>み  
を思<sup>おも</sup>ひ知<sup>し</sup>る時<sup>とき</sup>



砂山すなやまに來こよと書かきこす君きみが文ふみ數かずかさなりて  
夏なつもをはりぬ

ちかふらく都みやこにゆかばまた會あはむひと夏なつの  
みの戀こひははかなし

鎌倉かまくらのまぼろし今日けふも目めにうつる君きみが唇くちびる君きみ  
がたたむき



後  
の  
戀



君<sup>きみ</sup>見<sup>み</sup>じと<sup>か</sup>た<sup>く</sup>誓<sup>ちか</sup>ひて<sup>こ</sup>來<sup>こ</sup>しもの<sup>を</sup>もの<sup>の</sup>狂<sup>くる</sup>ほ  
し<sup>や</sup>また<sup>きみ</sup>君<sup>きみ</sup>を<sup>み</sup>る

ひと<sup>なつ</sup>夏<sup>なつ</sup>の<sup>う</sup>す<sup>き</sup>縁<sup>えん</sup>を<sup>か</sup>な<sup>し</sup>み<sup>て</sup>あり<sup>し</sup>と<sup>き</sup>聽<sup>き</sup>  
け<sup>ば</sup>あ<sup>は</sup>れ<sup>ふか</sup>深<sup>ふか</sup>か<sup>り</sup>



何時いつの日ひかかならず來きたるべき時ときと待まちちたる  
時は遂つひにきたりぬ

4

夏なつの夜よのうす紫むらさきのうすものうすき情なさけの君きみ  
を忘わすれず

この幾いく年とせいづこに往ゆきておはせしや問とへど  
笑わらひて答こたへたまはず

われと別わかれ今日けふまでひとり荒山あらかの窟いほのなか  
におはせしものか

5



たはむれに疲れし獅子が眠るごとしばしわ  
れらが戀もねむりぬ

6

ただひとり三年のあひだ遠海の黒き帆を見  
ておはせしと云ふ

君にちかふ阿蘇のけむりの絶ゆるとも萬葉  
集の歌ほろぶとも

あなけうと悪性ものの兄者人が君をおもふ  
と云ふはまことか

7



そのかなしみ今は微かになりぬれど消ゆる  
ばかりになりぬれど猶

8

歸らむといくたび云ひし君が聲あはれいく  
たびいづこへ歸る

われ勝ちぬされどをかしき君なれや人にほ  
これりわれに勝ちぬと

海見るはむかしの戀を見るごとし日毎夜毎  
に海をながむる

9



かたりつつかたみに憂しと思ひぬ覺めた  
る人と覺めざる人と

たはれめのごとくかはれる君なりき鬼灯鳴  
らすこともおぼえて

おとろへし君が姿を見むために生きながら  
へてありしこの身か

ただひとつ君をかなしむ目のふちのおしろ  
いやけのうす鉛いろ



ただひとつ汝を怖るわが少女つねに脱がざ  
る黒の手套

12

昨夜の九時かへりたまひしのち書くといと  
うつつなき消息は來ぬ

とこしへに別るる君にあらねども別れたる  
夜の氷雨をおもふ

羅馬より拿破里にいそぐたをやめに似たる  
姿を吾妹子に見る

13



筑紫ゆき去年わが靴に踏みにたる土をし踏  
まばこころ躍らむ

14

歸らずばながく筑紫に君あらばまた相見す  
ばいかがすべけむ

百束の文をわが手に残し置きてながく都へ  
かへらぬ少女

しめやかに降りつもりたる雪となりて君が  
心は一夜のこりぬ

15



冬の夜の濠にただよふ月魄かほのかに君を  
おもふこころか

16

この夜より午後の八時の時を忌むかなしき  
時を思ひ出づるゆる

不知火の筑紫の海に棄てにゆく君が心の惜  
しくもあるかな

あやぶみぬ筑紫少女はその胸を水甕のごと  
おもへりと云ふ

17



かにかくにわが身のうへや忍ぶらむ五島の  
海の秋のゆふぐれ

築地なるわだつみ色の館より出で來し去年  
の君をこそおもへ

さかづきをとどめし君が白き手はあたら筑  
紫の芹を摘むかな

のろはれし少女ひとりを救はむと思ひ立ち  
にし戀ならなくに



消息せうしにいはくその夜の停車場ていしやばの涙なみだかはかず  
ありて悲かなしき

20

いづれともわかなく君きみはながむらむ鎌倉かまくらの  
海有明うみありあけの海うみ

うらがなしじやがたら文ぶみにあらねども涙なみだも  
よほす君きみが消息せうし

21



祇

園



かにかくに祇園ぎんは戀こひし寢ねるときも枕まくらのした  
を水みづのながるる

女によ紅場こうばの提燈ちやうちんあかしかなしみか加か茂も川がはの水みづ  
あをきうれひか



大勝だいかつの女主人をんなあるじがふとりたるからだのごとく  
あつき夏なつの日ひ

4

つと入れば胸むねおしろいに肌はだぬぎし君きみありわ  
れに往いねと云いひける

簪かんざしはたまたま風かぜにゆらめきぬ比叡ひたいおろしの  
君きみにふく時とき

ねむたげの目めのまたたきに誘さそはれて蛾がはわ  
たるらし種たね二にの膝ひざに

5



白しろき手てがつとあらはれて蠟ろう燭そくの心こころを切きるこ  
そ艶なまめかしけれ

さかづきす岡おか崎さきに住すむ先せん生せいの髭ひげなつかしと  
云いへる女をんなに

おしろいは厚うきが可よかり口くち紅べには濃こきが可よか  
りと云いふは誰たが子こぞ

西さい鶴かくの五ご人にん女をんなのなかの子こかわれをとらへて  
放はなたざりしは



鳥邊野に夜半にゆかむと云ふは誰ささやき  
かはす舞姫のなか

先斗町のあそびの家の灯のうつる水なつか  
しや君とながむる

ゆるやかにだらりと帯のうごく時はれがま  
しやと君の云ふ時

叡山の荒法師とも云ひつべき人と遊びてい  
なづまを見る



舞扇まひあふぎかかるとれしきそよかせをわれに送おら  
むために開ひらくや

舞扇まひあふぎひらくと見みたる束つかの間まのその束つかの間まを  
よろこぶものか

この家いへを真葛まがらが原はらにかたどりて遊あそばむと云  
ふ子こもありしかな

明眸めいぼもわれにやうなし抱いだかねばかの三榮さんえいさ  
へあたひなからむ



仁丹の廣告も見ゆ橋も見ゆあまぼろしに  
舞姫も見ゆ

そのむかし伊左が慕ひし軒行燈伊左のごと  
くにわれも慕へる

木屋町の酔へるがごとき夜のいろに見惚れ  
てわれを忘れし子なり

落ちたるは地獄太夫が濡髪か千鳥が置きて  
ゆきし柳か



やみあがり吉彌がひとり河岸に出で河原蓬  
に見入るあはれさ

君とゆく河原づたひぞおもしろき都ほてる  
の灯ともし頃を

南座の幟の音がこころよくわが枕までひび  
き來る時

蓬の香水の香さては紅粉の香とさまさまに  
ものにはふ家



香煎かうせんのにほひしづかにただよへる祇園ぎえんは悲かな  
しひとり歩あゆめば

16

めづらしき清元きよもとを誰たが歌うたふらむ祇園ぎえんそぞろ  
に吉原きちげんおもほゆ

ゆる知らず涙なみだながれぬ閉とされし歌舞練場かぶれんぢやうの  
まへを過すぐれば

清水しみずの陶器たうきの舗みせの招牌かんばんの取とり入れいれどきを君きみ  
とかへりぬ

17



加茂川の水は浅かりかくてまたわが舞姫は  
情あさかり

かちわたり河原に來よと第一の舞姫を呼ぶ  
第二の舞姫

巴里の風橡を吹くにもまがふべし祇園の風  
は青柳をふく

圓山の長椅子に凭りてあはれにも娼婦のあ  
そぶ春のゆふぐれ



われをかし祇園に入ればたちまちに晝なき  
人となりにつけらしな

おもしろき隣二階のさわぎ唄聴きてもここ  
ろなぐさまぬかな

うなだれて四條の橋をわたる子は夢見るご  
とき眼差にして

紅樓夢なほ覺めざるにおどろきぬ牡丹を見  
ては口をおもへる



をかしくも艶めかしくも思はるる雑魚寝  
起のはれまぶたかな

舞ごろも祇園の夜をな忘れそと云ふがごと  
くに袖ひるがへる

かなしみを棄てむと京へ來しものをあはれ  
やさらに得て歸りける



わ  
か  
う  
ど



薔薇さきびの香かにほひきたりぬわかうどが涙なみだなが  
しし物語ものがたりより

ややありてああえや忘わするその夜よをとわがわ  
かうどはうるみ聲こゑしぬ



沈<sup>ちん</sup>丁<sup>ちやう</sup>花<sup>げ</sup>汝<sup>なれ</sup>と戀<sup>こひ</sup>をば争<sup>あらそ</sup>ひし日<sup>ひ</sup>のにほひよと友<sup>とも</sup>  
さりげなし

戀<sup>こ</sup>はれしに思<sup>おも</sup>ひあがりて聲<sup>こゑ</sup>高<sup>たか</sup>にさな語<sup>かた</sup>りそ  
ね去<sup>こ</sup>年<sup>ぞ</sup>の夏<sup>なつ</sup>のみ

騷<sup>さう</sup>客<sup>かく</sup>のわれもあはれにわかき日<sup>ひ</sup>のものな  
やみを額<sup>かぶ</sup>に刻<sup>きざ</sup>みぬ

黒<sup>くろ</sup>髪<sup>かみ</sup>の香<sup>か</sup>にも倦<sup>う</sup>みぬともうげに吐<sup>つ</sup>やける  
子<sup>こ</sup>のあはれなるかな



たくましき男をとこの肩かたに凭よる時ときの心こころだのみを忘わすれたまふな

6

かにかくに正體しやうたいもなく日ひを送おくるめでしれば  
とをさはな咎とがめそ

兄あにむすこそその名なはをかしどんふあんのらり  
くらりと時ときを送おくれる

ふところに短銃びやくあるをわがまへのたはれめ  
どもが知しらぬをかしさ

7



あやまりて君が心のありかをば無頼の子に  
も教へけるかな

8

思はずと云へば劍を取り出すおそろしき子  
とともにねむりぬ

往き暮れしるまんちつくのわかうどは永代  
橋の欄干に凭る

髪ながく惱ましげにもものを云ふ翰林の子  
のうつくしきかな

9



珈琲の香にむせびたる夕より夢見るひととなり  
なりにけらしな

大河の船の汽笛をきくごとにかなしと云ひぬ  
夜の女は

あなをかしやはらかき手にとらはれて亂行者  
も酒をたうべす

伽羅の香のみなざるなかに跣座するひと  
も歎けと秋のきたれる



うらわかき都みやこびとのみ知ると云ふ銀座ぎんざ通り  
の朝あさのかなしみ

忍しのびかに歎息なげいきの香かも通かよひ來きぬわがわかうど  
よ眠ねむりがたきか

秀す才さいゆるゑうらわかきゆる清きよきゆるこのかな  
しみを覺おぼゆるものか

少女せうとみな情なさけを知らずいまははや末ま法ぽうの世よと  
なりにけるかな



いざなふは夕蝙蝠のはばたきかかのあそび  
家の店清搔か

曇りたる君がこころを忍びゆく兩國橋のあ  
けがたの月

すてばちの身をたはれめのまへに投ぐわが  
世のすべて終りたるごと

たはれめは男の數をかぞへつつ君にまさる  
子なしと云ひける



その男會へばかならずああ切に元祿の世を  
戀ふと云ふかな

たそがれぬわれらが時は來りぬと出でゆき  
し子の行衛知らずも

蘭蝶を聴きつつかかる時死ぬも惜しからじ  
とぞ思ひ初めにし

さりげなき物語してうつくしき仇とともに  
一夜ねむりぬ



わかうどは幸さいはひなれやまぼろしに丈たけの黒くろ髪かみ  
まなさきを過すぐ

18

君きみを得えついでこと祝ほげとわが呼よびし聲こゑに應おこ  
じてかのかたき來きぬ

高たからかに勝かちほこりたる笑わらひこそ世よにたぐ  
ひなく寒さむかりしかな

隼はやぶさのごとくに往ゆきしはやりをの戀こひをあやぶ  
む窓まどにもたれて

19



おもしろし六が二となる骰子の目もかのた  
はれめの心がはりも

運命の腕とすればやはらかし枕とすればあ  
まりつめたし

あでやかに玲瓏たりし腕にはたはれをども  
も枕しかねつ

歡樂を追ふ子のなかにまじりゆくわれを見  
出でておどろきしかな



伯林の戀のたよりを書きおこすいんくも薄くなり  
にけるかな

いまでも汝は廣重の繪をながめつつ隅田川を  
戀しとおもふや

歡樂はあまりに悲しただひとり玻璃窓の外  
の夜をながめける

われひとりさらばと云ひて戸を出でぬささ  
らぎの夜の雲のなかに



醉

狂



少女をとめ云いふこのわかうどよ酒さか甕がらに凭よりて眠ねる  
を常つねなりしひと

酒さけびたり二十四にじゅうし時ときを醉すい狂きやうに送おくらむとしてあ  
やまちしかな



おもはれしわれを憎みてはなちたる汝が矢  
は逸れて酒甕を射る

4

覺めしわれ酔ひ痴れしわれ今日もまた相争  
ひてねむりかねつも

酒の國わかうどならばやと練り來貴人なら  
ばもそろと練り來

われを見て酒のにほひすあなけうと疾く往  
ねと云ふ聖にも會ふ

5



かの君の涙の酒に酔ひけるよ人は知らじな  
酒のかなしみ

さかみづきさなよろほひそ躓づかば魂を落  
さむさなよろほひそ

杯をふくむ子瓶を打ちふる子いと多くして  
宮うち日さす

諾とも云ひ否とも云へるまどはしき答を聴  
きて酒に往きける



さかづきのなかより君の聲としてあはれと  
云ふをおどろきて聴く

8

わが胸の鼓のひびきたうたらりたうた  
らり酔へば樂しき

まなさきに蒼蠅と見しは獅子なりき物あや  
まちしとろとろの目よ

君なくばかかる酔狂なからむとよしなき君  
を恨みけるかな

9



よき玉たまの琥珀こほろに似にたる酒さけのいろあまり見み恍ぼ  
れてわれを忘わするる

10

酔よひびとよ悲かなしき聲こゑに何なにうたふ酔よふべき身みを  
ば歎なげけとうたふ

さな酔よひそ身みを傷やぶらむと君きみ云いはず酒さけを飲のめ  
どもさびしきかなや

酒さけを見みていかにせましと考かんがふるひまに百もも年とし  
千ち年とし過すぎなむ

11



かかる世に酒に酔はずて何よけむあはれ空  
しき恒河沙びとよ

戀がたき挑むと云はれおどろきし弱き男も  
酒をたうべぬ

な戀ひそ市の巷に酔ひ痴れてたんなたりや  
ときたる男を

甕越にももの云ふひとの黒髪をただ見てある  
にこころよろしき



博打たすうま酒酌ます汝等みな日の本にあ  
れどおろかなるかな

夏の日の真晝の辻の打水と酒を打たまし東  
夷の子らに

ことわかず疑しげくなる時は壺の口より酒  
にも問ふ

おどろきて一夜のおひだ隠れたるみそか男  
は酒甕を出づ



いろいろの酒甕どもに圍まれぬ遁げあはは  
すばいかにすべけむ

16

くつがへす酒の甕より出でたるは誰にかく  
せし誰の艶書ぞ

あはれいま眠りの神のここ過ぐる時とて人  
は酔ひ倒れたる

酒肆に今日もわれゆくべらえぬあはれは  
れとぞ人のはやせる

17



屠らるる二の世のわれぞ目にうつるわが酒  
肆に夕日する時

溺れたるわがわかうどはあやしくも黒髪い  
ろの酒を酌むかな

酒に酔ひ忘れ得るほどあはれにも小さくは  
かなきわれの愁か

満つる時よろこびきたり満たぬ時かなしみ  
きたる酒甕を置く



南船北馬

枯<sup>か</sup>蓄<sup>き</sup>薇<sup>び</sup>落<sup>お</sup>つるひびきに  
おどろきぬ夜<sup>よ</sup>半<sup>は</sup>の酒<sup>さ</sup>  
場<sup>ば</sup>のしづかなる時<sup>とき</sup>



山<sup>やま</sup>荒<sup>あら</sup>く海<sup>うみ</sup>きほへども少<sup>をと</sup>女<sup>め</sup>らはうつくしと云<sup>い</sup>  
ふ筑<sup>つく</sup>紫<sup>し</sup>よく見<sup>み</sup>む

旅<sup>たび</sup>ゆくか或<sup>あ</sup>るは戀<sup>こひ</sup>よりのがれしか知<sup>し</sup>らずう  
つけて海<sup>うみ</sup>にうかびぬ



漏刻の水落ちつくすさびしさをこの夜おぼ  
えつ夏の旅寐に

4

旅ゆけば唐棣の衣もおもしろと或る夜かづ  
きて君がり通ふ

海のかせ葡萄のにほひ唇のおとを思へばこ  
ころ騒ぎぬ

あたらしき船唄かなし松の葉の琉球組の唄  
のごとくに

5



ああその夜無花果の葉のあなたより覗きし  
星をえこえ忘れね

はるばるとさすらひ来れば鷗さへ善知鳥の  
ごとく悲しげに啼く

波越えて通はましとは楫まくらよきに慣れ  
たる君の言葉か

うつくしき稻佐少女はつれなくも酸き木の  
果をわれにあたふる



君に似し天草島のたをやめの髪おもしろし  
總角にして

空と海たぐひもあらぬ全きものふたつなが  
めて心なごみぬ

伊佐奈神すこやかにして今日もあり千年い  
まだ老いざる海に

その真晝柑子の蔭に見し夢のなかの少女を  
いまだ忘れず



われ迷ふ橋の森ひろうして海邊山邊の方も  
わかなく

われは練る昨日は都大路また今日は柑子の  
かんばしき道

山に問ふ山は答へず山を往き山のこころを  
いまださとらず

常世の子現世の子と會ひぬべきところと高  
き山しづかなる



善ぜんならぬはた悪あくならぬなかほどのことを好この  
まず旅たびにしあれど

いとさむき潮うしほのなかにわが戀こひを葬ほうむらばやと  
北海ほっかいに來きぬ

かかる子こは戀こひにふさはず大海おほうみの勇魚いさな取とりと  
もなるべかりけり

忘れねど忘れしごとき顔かほをして戀こひ棄すてし子こ  
は北海ほっかいにゆく



北海の夕焼雲のうすあかりほのかにさしぬ  
なみだする頬に

臘虎船かへらずなりぬ新潟の娼婦ら切に待  
つと泣けども

弟が薩摩潟より書きおこす消息よめばこほ  
みぎの啼く



吉井勇著

初戀  
昨日まで  
戀愛小品  
戀片戀人

吉井勇著



大正四年四月十一日印刷  
大正四年四月十五日發行  
定價金六拾錢

著者 吉井勇  
發行者 東京市麹町區有樂町一丁目一番地 朝山仁三郎  
印刷者 東京市本所區番場町四番地 朝岡平藏  
印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社

發行所 東京市麹町區有樂町一丁目  
九の内三番二十一號館  
初山書店  
振替東京二四一七番  
電話本局二一三二番



278  
200



終